

有機栽培宇治茶の海外展開で、 魅力ある一次産業を創出する

株式会社 播磨園製茶

代表取締役 播磨 余土行さん



播磨 余土行さん

自身の体を通じて有機栽培の必要性を実感

日本緑茶発祥の地ともいわれている宇治田原町。当地で江戸時代末期から続くお茶農家の六代目であり、株式会社播磨園製茶の代表取締役播磨余土行さん。山あいの斜面に広がる約6ヘクタール、全34カ所の茶畑で栽培している同社の茶葉は、すべて無農薬無化学肥料農法による有機栽培です。「有機栽培をしているお茶農家は全国的に少なく、京都府内でも有機栽培の生産量は府内全体のゼロコンマ数%しかありません」と播磨さん。かつては除草剤を使用していた同社が有機栽培へシフトチェンジしたのは、昭和47（1972）年の夏のことです。当時25歳の播磨さんが、害虫駆除のため農薬を散布している最中、薬害で倒れたことがきっかけでした。

「薬品の影響を実感して、農薬も化学肥料も使わない有機栽培に踏み切りました。でも最初は散々で、3、4年目までの収穫高は以前の約半分に減りました。努力を続けるうちに収穫量が安定してきて、昭和60（1985）年からは茶園全面で有機栽培を行っています」。



約6ヘクタールの茶畑全面で有機栽培を行っています

有機栽培の品質が海外での販路拡大の強みに

有機栽培緑茶の最大の特長は、食の安全性にあります。また、カテキンなど体に良い成分を多く含む健康食材としても注目されています。その強みを生かした『有機粉末緑茶』『有機食べる緑茶』などの商品は、健康志向の時代にマッチするものでした。しかも平成13（2001）年に農林水産省の有機JAS認証を受けていた同社の商品は、ステータスのある日本茶の中でも品質が高いと、海外の輸入品展示会のバイヤーが注目し、次第に商談が舞い込むようになりました。そうした新しいニーズに沿うように、同社では、平成19（2007）年のアメリカのオーガニック認証・NOP認証の取得をはじめ、世界基準での品質証明にも尽力してきました。

「ヨーロッパでも、ワインを日本へ輸入していたイタリアのバイヤーが、当社のお茶を向こうで売りたいと

農林水産物の活用

言ってくる。ただ、そのためにEUにおける有機農産物認証・ICEAを取得してほしいと言われました。審査は厳しいのですが、平成21（2009）年に『有機お手軽宇治抹茶』が、日本の農産物で初めて認証を受けました。



海外向けに開発した『有機お手軽宇治抹茶』（前列右端）『有機食べる緑茶』（後列右端）を含む輸出商品群

高付加価値有機栽培茶の生産拡大に着手

当時、有機農産物に対する日本の認証制度は、ヨーロッパでは認められていませんでしたが、平成22年（2010）年に同等性が認められ、現在はEU全域で同等の認証を受けています。その後、イタリアのバイヤーが代理店となって、商品をドイツやスウェーデン、スイス等での展示会にも出品し、各国へ認知度が広がっていきました。平成15（2003）年にはフルオートメーション製茶工場を建設し、増産にも備えてきた同社では、売上増加への期待が高まっていたといいます。しかし、東日本大震災が発生したことで受注が大幅に減少しました。

「特に売上が落ちたのは、原発の汚染水漏れのおきです。日本の人は京都への影響はないと分かりますが、海外の人には分かりませんから」。

平成24年度の助成金申請は、そんな同社にとって、海外展開の再出発ともいえる事業です。近年は、EU諸国における抹茶に対するニーズが、ステータスから健康や美容目的へと変化していることから、茶葉の栄養分を丸ごと、しかも手軽に摂取できる粉末タイプの生産拡大を図りました。その中心に据えたのが、『有機お手軽宇治抹茶』と『有機食べる緑茶』。海外展開を意識した、「日本茶」であることがわかりやすいスタイリッシュなデザインのパッケージと、日常の飲み物として購入しやすい比較的安価な価格を特徴とする商品です。日本最大のオーガニック専門展示会『オーガニックEXPO』をはじめとする国内外の展示会に積極的に参加しながら、現地語で作成したラベルを貼るというきめ細かい作業を経て各国に輸出。売れ行きは順調に伸びています。「これ

までの経験から、飲みやすい粉末は売れると確信していました」と播磨さん。原発の汚染水への懸念が沈静化してきた現在、以前にも増して大きな手応えを感じています。

「今後2、3年で、販売量は1.5倍くらいになると予測しています。従来の展示会や現地の代理店を通じた販売だけでなく、最近はヨーロッパのほかに中東やエジプトなど、世界各国から当社へ直接オファーがあり、直接卸しも行っています。日本料理が世界文化遺産に認定されたことも、チャンスだと思います。様々な国から、日本料理や日本酒、日本茶の引き合いが来ていますから」



現地代理店を通して海外の展示会にも積極的に参加

海外進出によって地域の雇用と自然を守る

今回の事業には、主に海外展開での販売増によって、荒れた農地の有効利用や耕地面積の拡大推進、雇用創出を含めた、魅力ある一次産業を創出する目的があります。

「有機栽培での除草は人の手引きで行いますので、今は地元のシルバーセンターにお願いして1ヶ月ほどで延べ200人ほどを雇用しています。それを増やしていきたいですね。当社の農法は自然にマッチした形だと思います。実際に有機栽培の畑は土が柔らかいですし、地域の自然を守ることもつながります。海外のマーケットを広げることが目標としながら、健全な商売をもって、地域や世の中に貢献していきたいと考えています」。

事業概要

株式会社播磨園製茶

http://www.harimaen.co.jp/

代表：代表取締役 播磨 余土行

業種：有機栽培による製茶業

創業：明治34年

住所：〒610-0211 京都府綴喜郡宇治田原町奥山田川

上152-1

TEL：0774-88-3183 FAX：0774-88-3881